

能代高

(15)

秘密のボックス

頭髮は、長くても三分刈。一分とか五厘刈もあるというのを針金三郎（5期、井坂記念館）は中学生になって、初めて知った。ちよつと長くしているとバリカンを持った先生に追いかけられた。

入学早々は、級友のほとんどが着物姿。制服がまだできあがらないためだ。中に四、五人、早くも制服を着ていた。ワケを聞くと、笑えなかった。彼らは「落第組」。

しかし、この「先輩」たち、そろつて親切。テストの時、「キミ、ここちがつてると」「うしろを振り返って、針金に

正解を教えた。同じようなテストが二度目なので、余裕があったのだろう。こんなにやさしい先輩を落第させるなんて、学校も非情だな——と針金は思った。針金は、クラスの人気者だった。

「きようは、どだな。もうこれ以上我慢さえなくなつた」級友の山崎久男（故人、元能代市議会議長）、加藤貞美（戦死）らにそういわれると、針金は弱い。

「よし、わかつた。学校終わつたら、家さ来い」

こうして、針金たちのスリルに富んだ「冒険」が始まる。

「至誠力行」がモットーで、まじめに徹していた校風。自分勝手に町の映画館へ行くことなど許されるはずがなかった。映画を見る機会は、学校で先生が引率して行つた時だけ。お決ま

りの「教育映画」で。

「ほかの映画も見たかつたども度胸ねして……」

と、後輩の島田哲一郎（7期、一長堂書店）たちはこらえたものだ。

男女七歳にして……の時代。

女学校と合同の「映画教室」の時も、一階は中学校、二階が女学校とはつきり区別。階段のところに見張りの先生が立つた。

現実には、こんなにも厳しい。ところが、針金だけは、どんな映画も望みどおり。タネをあかすと、いまの能代病院の近くにあつた自分の家が映画の大正館。

正館。

「針金君、いだすか」

「オーイ、こつちだ。まんずあがれ」

約束どおり、二、三人の級友が遊びに来た。ひとまず二階の居間に案内して、菓子などをふ

るまう。映画の本やレコードがものすごくあつた。やはり遊びに行つたことのある桜庭宏起（千代田火災）も驚いたほど。

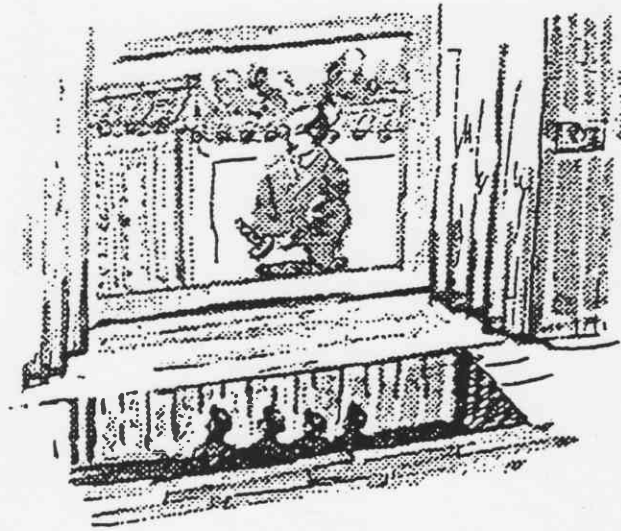
早く、早くと級友にせがまれた針金は、例によつて、秘密の隠れ場所に案内した。

そこは、オーケストラボックス。無声映画当時はなくてはならないボックスだったが、トーカーに代わつてからは、用がなくなつた。中にもぐりこんでいれば、客席からはみえない。先生に見つかる心配のない「特等席」だった。

「キミは、世界中で一番恵まれた男だよ。幸せだなあ。オレのえ（家）も、映画館であればいかつたあずな」

こういわれた針金は、軽く受け流して

「そうがなあ。そんたふうに見えるがなあ」



さし絵は戸松恭一（新11期・能代高教諭）

わが国初のトーカー”マダムと女房”を、針金は、こうやって見た。”若き日の感激”なんかも印象深かった。

”パリの屋根の下”は、先生の引率で全校生が見た。すでにこれも見物ずみの針金は、あそこはこうなって、それから……と、解説役。あこがれの女優は川崎弘子、ほか数人……。

「針金、ちよつと来い」

ある日、突然教員室に呼出をくつた。ばれるわけがない映画の秘密鑑賞がばれてしまったのだ。

「おかしな。どこでわかったのがな」

あれだけは、いままってナゾだ。多分、映画館を見ているところではなく、映画館の出入口をソツと出たところかなにかを先生に目撃されたのだろう。帽子を隠したりして、みんな

用心深く行動していたはずなのに――。

この件に関した”説教”はどうしたわけか、そんなに厳しくなかった。とくに針金の場合は軽かった。うす気味が悪いくらい。自分の家が映画館というところで、大目に見てくれたのかと、善意に解釈した。

ところが、世の中はそう甘くなかった。学期末の成績表を見てギョツとした。テストはそんなに悪くなかったのに、修身が落第点スレスレ。

「こんだどこで、あの時のカダキとるなんて……」

（敬称略）

